

厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））
被災地のアルコール関連問題・嗜癖行動に関する研究
（研究代表者 松下 幸生）

平成 26 年度分担研究報告書

多量飲酒者への介入調査

研究分担者 杠 岳文 国立病院機構肥前精神医療センター 院長

研究要旨 本研究の目的は、被災地住民の飲酒実態の把握、被災地で被災者の健康管理にあたる保健師など支援者へのアルコール問題に関する研修とその介入技法としての飲酒量低減指導技法（ブリーフ・インターベンションと集団節酒指導）の技術移譲及びその効果検証、被災者に配布する「アルコールとうつ」に関する啓発小冊子の作成である。最終年度は、被災地釜石市において保健師を対象にアルコール問題の現状と早期介入技法に関する研修会を 5 回開催するとともに、医師その他の医療従事者、市役所職員に対してもアルコール健康障害と飲酒量低減指導に関する研修会、講演会を 3 回開催した。さらに、被災者を含む市民向けに啓発のためアルコール健康障害に関する講演会も開催した。また、3 年間に亘る技術移譲のための研修がもたらした保健師のアルコール関連問題への介入姿勢や技能の効果検証を行い、「アルコール問題に関連した知識」、「アルコール専門医療との連携」、「減酒支援に対する自信」について向上が認められ、すでに特定保健指導の中でも実践されており、保健師のアルコール問題対応能力向上に一定の成果が確認できた。

研究協力者

石丸正吾：高槻市民病院 精神科医師

阿部祐太：花巻病院 精神保健福祉士

藤田淳一：花巻病院 副看護師長

山崎珠美：肥前精神医療センター 看護師長

白石亜紀：肥前精神医療センター 看護師

小副川沙耶：肥前精神医療センター 看護師

長祥子：肥前精神医療センター 看護師

A. 研究目的

東日本大震災の被災地では、その心理的ストレス、失職、あるいは仮設住宅への転居など生活環境の変化から、被災者のみならず支援に当たる立場の者にも飲酒量の増加が懸念されている。また、阪神大震災での経験から、これまで事例化していなかった潜在的なアルコール依存症が、仮設住宅のように密集し、また周囲の目も届きやすい構造や環境の中で顕在化してくることも懸念される。過度の飲酒は身体健康被害のみならず、交通事故などの事故やうつ病などの精神的な不調、人間関係、家庭内や職業上の問題にまでその害が及び、個人、家庭、

職域いずれにおいても、その健康、機能、作業能率、意欲、活力を失わせ、ひいては被災地復興の障害にもなり得る。

われわれは、被災地におけるアルコール問題の実態を把握するとともに、アルコール健康障害に対する啓発と被災地住民のアルコール関連問題に対する有効な介入技法の被災地域への普及のために保健師を中心に支援者向けの研修会を開催し、その効果検証することを研究目的とした。

B. 研究方法

1) **保健師等の支援者を対象にしたアルコール関連問題への介入技法普及のための研修会、講演会の開催**

最終年度の本年度は、被災地で直接住民の健康管理に当たる保健師を対象にアルコール問題の現状と早期介入技法としての飲酒量低減指導（ブリーフ・インターベンションと集団節酒指導）技法に関する研修会、事例検討会を計 5 回開催するとともに、保健師以外の支援者となる、医師その他の医療従事者、市役所職員に

対しアルコール健康障害と飲酒量低減指導に関する研修会、講演会を3回開催した。さらには、被災者を含む市民向けにアルコール健康障害に関する講演会を開催し、支援者と被災者のアルコール問題の二次予防と保健師等への飲酒量低減指導技法の技術移譲を目指した。

2) 研修がもたらした保健師のアルコール関連問題への介入姿勢や技能への効果検証

保健師へのアルコール問題への介入に関する研修会をこれまで3年間に亘り行ってきたことで、保健師のアルコール問題に対する取り組みの姿勢や知識、技能がどのように変化したかをAAPPQ (Alcohol Problems Perception Questionnaire) 日本語版とわれわれが新たに作成した「生活習慣としての飲酒習慣への介入について」のアンケートを研修の前後で実施し、研修の効果を検証した。

(倫理面への配慮)

アンケート調査は、専門職にアルコール関連問題に対する関心や姿勢、知識、技能といったことに関して自己評価を問う内容のみで、心理的負担もなく、個人情報を含むものでもないため、倫理的問題はない。

C. 研究結果

1) 保健師等の支援者を対象にしたアルコール関連問題への介入技法普及のための研修会、講演会の開催

本年度は、保健師だけでなく、釜石保健所と釜石市医師会の協力を得て、医師その他の医療従事者、市役所職員、栄養士といった支援者にも研修の対象を広げ、被災者を含む市民向けの講演会も開催した。

- 第1回釜石市訪問調査・研修 平成26年
6月19日～20日(杠、石丸、阿部、山崎)
6月19日:平成26年度第1回保健師向け研修会「アルコール問題の現状と対策～減酒支援の理論と実践」

6月20日:平成26年度第2回保健師向け研修会「減酒支援の実践」,「明日からできる減酒支援～ワークブックと飲酒日記を用いた介入～」

- 第2回釜石市訪問調査・研修 10月17日～18日(杠、石丸、阿部、白石)
10月16日:平成26年度第1回医療従事者向け釜石保健所アルコール研修会(釜石保健所)「アルコール問題の現状と対策～減酒という新たな選択」
10月17日:平成26年度第3回保健師向け研修会「減酒支援の実践」,「Brief Interventionを上手に行う10のコツ」,「明日からできる減酒支援～ワークブックと飲酒日記を用いた介入～」

- 第3回釜石市訪問調査・研修 12月18日～19日(杠、石丸、阿部、小副川)
10月18日:平成26年度第2回医療従事者向け釜石市医師会アルコール研修会(県立釜石病院)「減酒支援のコツ～お酒を長く楽しんでいただくために～」
10月19日:平成26年度第4回保健師向け研修会 事例検討会

- 第4回釜石市訪問調査・研修 平成27年
2月12日～13日(杠、石丸、藤田、長)
2月12日:平成26年度第1回市民向けアルコール講演会(釜石市保健福祉センター)「お酒を長く楽しむコツ～お酒と上手く付き合い、より健康的な生活に近づきましょう～」
2月13日:平成26年度第5回保健師(栄養士)向け研修会 事例検討会
2月13日:平成26年度第1回市役所職員向けアルコール関連問題研修会(釜石市役所)「お酒を長く楽しんでいただくために～お酒と上手に付き合うコツ～」

2) 研修がもたらした保健師のアルコール関連

問題への介入姿勢や技能への効果検証

最終年度も事例検討会を含めて5回の保健師向け研修会を開催した。3年間で30名の保健師に対してAAPPQ日本語版と「生活習慣としての飲酒習慣への介入について」のアンケートを実施したが、この30名には県外からの支援保健師も多く含まれ、また人事異動もあり、1年以上の間隔をあけて研修前後の2回の調査ができた保健師は地元の保健師を中心に7名のみであった。この7名について保健師のアルコール問題に対する取り組みの姿勢や知識、技能がどのように変化したかを研修効果として検証した。例数が少なく統計的な検定には耐えないが、各アンケート項目について研修の前後で平均値が1ポイント以上の変化を認めた項目を「変化あり」として下記に挙げる。

- アルコールやアルコール関連問題に関する仕事上の知識がある
- 飲酒問題の原因について、自分の職務を果たすのに十分な知識がある
- アルコール依存症について、自分の職務を果たすのに十分な知識がある
- アルコールが及ぼす身体的な影響について、自分の職務を果たすのに十分な知識がある
- アルコールが及ぼす心理的な影響について、自分の職務を果たすのに十分な知識がある
- 飲酒問題を生じさせるリスク因子について、自分の職務を果たすのに十分な知識がある
- 飲酒者に対し、長期にわたって相談にのり助言する方法を知っている
- 飲酒やその影響について、患者に適切にアドバイスできる
- 飲酒者を援助する責務をしっかりと認識している
- 必要な時は、患者に飲酒について尋ねてよい
- 必要な時は、飲酒について尋ねてよいと患

者は考えている

- アルコール関連問題に関するどのような情報でも、患者に尋ねてよい
- 飲酒者と関わる中で必要と感じたなら、専門職としての責務を明確にできるように助けてくれる人を、容易に見つけることができる
- 飲酒者と関わる中で必要と感じたなら、飲酒者への最善の関わり方を考えるのを助けてくれる人を、容易に見つけることができる
- 飲酒者に対して、全くうまくかかわれないと感じる
- 自分が日本酒3合/日程度の患者さんに節酒指導を行ない、酒量を2合/日程度までに減らすことができるという自信が多少はある

いずれの項目に対しても、研修会参加後アルコール問題への取り組みに対して、積極的あるいは改善する方向への好ましい変化を認めていた。

D. 考察

被災地において二次予防を積極的に進めていくためには、保健師のみならず支援者全体で二次予防の必要性和効果を共有する必要がある。最終年度は保健師に対する研修に加え、医師などの医療従事者、市役所職員といった支援者向けの講演会と研修会を開催した。また、幅広く市民全体にアルコール問題に関する啓発を行いアルコール問題に対する意識の高揚を図る必要もあると考え、被災者を含む広く市民向けの講演会を開催した。

これまで3年間に亘って保健師を中心に支援者に対してアルコール関連問題とその早期介入に関する研修を行ったが、保健師の自己評価として「アルコール問題に関連した知識」、「アルコール専門医療との連携」、「減酒支援に対する自信」などについて向上が認められるとともに、すでに特定保健指導の中でも実践されてお

り、保健師のアルコール問題対応能力向上に一定の成果があったこと確認できた。

E . 研究発表

1 . 論文発表

Chieko Ito, Takefumi Yuzuriha, Tatsuya Noda, Toshiyuki Ojima, Hisanori Hiro, Susumu Higuchi: Brief intervention in the workplace for heavy drinkers: a randomized clinical trial in Japan. Alcohol Alcohol 50(2): 157-63, 2015

大坪万里沙、武藤岳夫、杠岳文：アルコール依存、薬物依存 . 内科 115(2): 267-270, 2015

2 . 学会発表

杠岳文：アルコール使用障害を併発したうつ病に対する飲酒量低減の試み、第11回日本うつ病学会シンポジウム、広島県広島市、広島国際会議場、7.21、2014

杠岳文：減酒支援の実践～そのコツとHAPPYプログラム～、平成26年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会ワークショップ減酒支援の理論と実践～ブリーフ・インターベンションとHAPPYプログラム、神奈川県横浜市、パシフィコ横浜、10.4、2014

杠岳文：「アルコール健康障害対策基本法」への期待と課題 . 第27回九州アルコール関連問題学会熊本大会市民公開講座基調講演、熊本県熊本市、熊本県民交流会館パレア、2.21、2015

F . 知的財産権の出願・登録状況

1 . 特許取得

なし。

2 . 実用新案登録

なし。

3 . その他

なし。